作品梗概集 6

1. ここに掲載した各梗概は、十七世紀フランス演劇研究会における発表をまとめたものである。
2. 各々の梗概の執筆は、研究会での発表者が担当した。
3. 掲載の順序は、原則として、担当者の意図を尊重し、担当者別にまとめ、その中では初演年代順とした。
4. 初演年代は、原則としてデイエルコウフ＝オルスボエルに拠ったが、他の研究者の推定に基づく場合はその研究者の名前を年代の後に付した。
5. 読者の便宜を考慮して、作品梗概集の後に索引を付した。

Rotrou: *Cosroès*

ジャンル　五幕韻文悲劇
初演　1648年　オデル・ド・ブルゴーニュ座
出版　1649年
出典　Lope de Vega “comedia famosa de las Mydanças de Fortuna y successos de don Beltran de Aragòn.”

ランカスターは特にコルネイユとの関係でこの作品を論じ、相互に『ロドギュンヌ』から『コスロエス』へ、そして『ニコメード』へと影響を与え合っているとした。一方、シェレールはこの作品の実質的な主人公であるシロエスを指して「フランスのハムレット」と評したが、モレルはシロエスの無力さはアルディの主人公のそれを思わせると言う。この点ではアダンも同意見で、『コスロエス』をスペイン種の悲喜劇の範疇でとらえ、別の場所では作者を、(コルネイユよりも)ガルニエ、アルディによって上演された古い伝統に忠実で、主人公は「戦う人」ではなく、「犠牲者」だと考えている。ほぼ同じプロットで構成される芝居の中にあって、シロエスはコルネイユがその影響下に作り上げたニコメードとは対照的な人物である。老いた父、邪悪な継母、野心家の義弟など個々の登場人物の性質も大変に異なっている。父王の狂気、自殺強要、恋人の身分判明、歴史的な枠組の軽視などの悲喜劇的要素に加え、中立の控えの間、任意の城の広間の使用によって場所の一致を守ろうとした努力がうかがわれる。時間は特定されていないが、24時間の枠を外れるものではないであろう。18世紀の再演時には、シロエスの恋やその恋人の身分判明などを削除し、喝采を得たという。しかしモレルの「運命を乗り越えることができない人間の永遠の別れのドラマ」という評価が的を射たものかどうかは疑問である。

〔第一幕〕ペルシャの皇后シラ Sira は長男で、先妻の息子シロエス Siroès に自殺を強要し、口論となる。挑発に乗ったシロエスが剣に手を掛けた瞬間に実子で次男のマルドザヌ Mardesane が来合わせて、止めに入る。原因が自分にあると知ったマルドザヌは自分には野心がないことを表明するが、兄は聞き入れない。当人にその気持ちがなくとも、周囲がそれを許さないと言うのだ。二人の議論はかみ合わないまま、重臣の登場で中断される。マルドザヌが退場すると、シロエスはシラの挑発もあって、重臣の謀反の勧めを聞いて逡巡を重ねる。そこへマルドザヌの将軍職への就任と父コスロエス Cosroès の狂気、シラへの盲従を告げる報告がある。シロエスは再び、シラの「裏切り者め、自分が破滅するか、息子が統治するかだ」という捨てぜりふを思い出し、謀反に傾く。

〔第二幕〕狂気の発作を繰り返すコスロエスが正気に戻ったのを捉えて、シラは王位をマルドザヌに譲るように進言する。コスロエスは自分が親殺しの結果、王位を継いだ事を忘れることができず、またシロエスがシラに剣を向けたことを聞いて、了承する。マルドザヌは自身の破滅を覚悟しながら、王位を受ける。シロエスは召還され、逮捕される。サルダリーグ Sardarigue はシラに命じられて、彼の自殺を強要すべく、牢獄に赴く。

〔第三幕〕シラは侍女に毒薬と剣を預けて、シロエスの自殺幇助、実は暗殺を促す。密談の後、サルダリーグがシラを逮捕するため、現れる。彼はコスロエスが退位した以上、シラには何の権限もなく、彼女が前に出した命令には効力がないと言う。そして逮捕はシロエスの命令で、彼が王位継承したと告げる。シラは周囲を見回し、孤立無援であることにようやく気付く。牢獄に引かれて行くシラの目前にシロエスが来る。立場が逆転した二人の対面は、再び同じ口論の繰り返しとなったが、すでに勝敗は決しており、シラは呪いの言葉を残して去る。重臣らにコスロエスの処遇を迫られ、またもや逡巡する。恋人ナルセ Narsée はシラの娘とされていた。「母」の情状酌量を訴えるナルセもこの決断の障害であった。

〔第四幕〕密告の手紙で、シラが自分の暗殺のため、毒薬と剣を用意していたことを知るに及んで、シロエスは怒りをあらわにする。彼女は「残虐な継母」から、「嫌悪すべき女」に転じた。そして側近の話から、ナルセが実はシラの娘ではなかったことが判明する。幼くして死んだ娘に似ていたことから、引き取って育てられたのだった。また、そこに宮廷内外の状況がシロエス擁立に有利に動いているとの報告が入る。唯一の障害は、ただ父に対する思慕の念だけである。悩みつつ退場するシロエスに入れ代わり、ナルセは実の父で、シロエスの擁立に動いた重臣に対面、事情のすべてを知る。

〔第五幕〕シラはシロエスの前に引き出され、シロエスの傲慢をなじり、抵抗する。シロエスは激怒し、自殺するように命じて退場させる。マルドザヌも同じく断罪される。即位しながら、尚、良心の呵責にさいなまれるシロエスは謀反の責任を周囲に転嫁するがごとく、恨み言を連ねる。そこへコスロエスが妻子の命乞いに来る。コスロエスの哀れな姿にほだされ、釈放を命じ、迎えに行かせる。ナルセが入れ代わりに走り込んで来る。マルドザヌが用意された剣で自殺したという。その話の終わらないうちに、シラとコスロエスの服毒、後追い自殺が知らされる。シロエスの狂乱で幕が閉じる。

（浅谷真弓）

Rotrou: *Les Captifs ou les Esclaves*.

ジャンル　五幕韻文喜劇
初演　　1638年　オデル・ド・ブルゴーニュ座
出版　　1640年
主な出典　プラウトゥス«捕虜»

1630年上演の«メナエクムス兄弟»、36年の«二人のソジー»に続いて書かれたラテン喜劇の翻案。原作にはない女性の登場人物を加え、フランス風の舞台を心がけた。しかし、ドービニャックは«演劇作法»第4部第7章「哀傷的な台詞あるいは情熱と心の感動について」で次のように批判している。「それでプラウトゥスの『捕虜』がロトルーによってフランス語の劇に移された時、登場人物の食客は食べることしか話さず、かつてはローマの元老院議員を楽しませたであろうが、われわれには舞台に出てきた許しがたい大食漢としか映らない。このような人物はもういないし、大食よりもむしろ鯨飲が食卓の放縦である。下品な歌と上品な作法がいりまじるとしてではあるが。」同様に全集版の校訂者であるヴィオレ・ル・デュックもこの点で作者の才能が発揮されなかったことを遺憾としている。

場所は前2世紀に栄えたギリシア同盟の一つで、ギリシア本土の山岳地帯に位置する、アイトリアに設定されている。時間はエジェの誕生日の一日。

〔第一幕〕アイトリアの金満家、エジェ Hégée の娘、オランピー Olympie が友だちのフィレニー Philénie がふさぎこんでいる理由を尋ねると、実は奴隷に恋してしまったのだと言う。彼女は子供のころ誘拐されたオランピーの兄と婚約していて、結婚を条件に財産を受け取ることができる。父親同士が決めた約束である。エジェは彼女が次男と結婚しても良いと考えていた。オランピーは時間と理性の声を聞くように忠告して退場する。一方、食客のエガジール Egazile はエジェに誕生日の夕食会への招待をせがんでいるが、主人のエジェはそれどころではない。新しい奴隷の到着を待っているのだった。

〔第二幕〕オランピーとフィレニーの奴隷は恋仲で、同じ主人に仕えたいと言い合っている。しかし、主人のフィレニーに別の思う人があると打ち明けられて、ふたりは邪魔をしないと誓う。フィレニーに恋されているフィロクラート Phikocrate はもう一人の奴隷、ティンダル Tyndare (実は子供のころ誘拐されて行方知れずになったエジェの息子。誰もそのことを知らない。)と謀って、入れ代わることにする。彼はまんまと実父の家に奴隷として入り込み、ティンダルはフィロクラートとして医者の家に買われて行く。ティンダルは偽ティンダルが「フィロクラートの父」を探しに行くのを許してくれと頼み、鎖を外される。エジェはフィロクラートの父の財産が目当てである。一番船が港を出るまで、と約して偽ティンダル、即ちフィロクラートは自由を得た。

〔第三幕〕エジェはオランピーを急いで、フィレニーの方の首尾を尋ねる。オランピーは兄が不在

である以上、約束は無効だと主張し、また自分が何とか手を打つので、時間をくれと言う。父はしぶしぶ同意する。そこへティンダルの身元を知る別の奴隷が現れ、様々な工作も空しく正体が露見する。忿懣やる方ないエジェは奴隷たちを皆、鎖につなぎ、退場させる。食客のご機嫌取りも効き目がない。

〔第四幕〕食客と主人の腹の探り合い。結局、主人は神様方に犠牲を捧げれば息子が帰って来るという食客の勧めを聞き入れる。犠牲を捧げ、夕食会を催すことにしたエジェは、奴隷たちにも相伴させようと言い出す。

〔第五幕〕古い奴隷が連れて来られる。彼から息子を売ったことを知らされ、問い詰めると、ティンダルこそがその息子だと判明する。そこに帰ったティンダルは主人が戻って来て、フィロクラートも同席しているのに驚く。そして皆が彼をエジェの息子だと証言する。オランピーはティンダルが兄と知ってこれも驚く。喜ぶエジェに付け込んで、フィロクラートは自分とオランピーとの結婚を承諾させる。フィレニーが呼ばれてやって来る。彼女の恋する「フィロクラート」ことティンダルが現れ、結婚を申し込む。ふたりの恋仲の奴隷たちも結婚を宣言し、万事が決着する。

（浅谷真弓）

Rotrou : *Amélie*

ジャンル　五幕韻文悲喜劇
初演　1633年頃（ランカスター）、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版　1637年
出典　先行の悲喜劇，田園劇のパターンを踏襲

ロトルー自身が1632年頃に執筆した『恋する巡礼女 Pèlerine amoureuse』と主筋はほぼ同じといえる。だが構成は緊密さを欠き、不要な場面やエピソードが少なからず散見される。他の作品からの借用部分や欠点を数えあげればきりがないが、恋愛における虚実の駆け引きへの偏執的こだわりという点で、まさしく時代の作品ではある。やんちゃなエラントの人物像には、少し狂気じみたものがある。ランカスターは、エラントとリジダンのカップルは不要と言っているが、緊張感が皆無で気の抜けたような遊蕩気分が漂うこの作品の中で、エラントは唯一のスパイスになっている。時は二日にわたるがほぼ24時間、場所はアメリーの家の付近と森の二か所。

［第一幕］アメリー Amélie は美男ディオニス Dionis に慕われている。自分も彼を恋しているのだが、面と向かって気持ちを伝えるほどにはまだ彼の愛情に信頼をおいてない。そこで侍女ドリーズ Dorise の助言にしたがって、泉のほとりで眠ったふりをし、寝言で彼に大胆な恋の告白をする。だが情熱的ではあるが純情なディオニスは戸惑うばかり。まして目覚めた（ふりの）彼女が、夢は所詮夢でしかない、と言うものだからなおさら混乱する。そこにアメリーの父が娘の婿にと決めた大金

持ちのエラスト Eraste が現れ、恋人たちの邪魔をする。エラストはどこか暗い影を背負った男だ。皆は彼を敬遠し、口実を設けて去ってしまう。

［第二幕］ほら吹き兵士のエミール Emile もアメリーに恋している。従者を恋の使者にして彼女を口説いているのだが、その彼女から恋文がほしい、と言われた。読み書きのできないエミールはさすがに困り、ディオニスに代筆を頼む。彼は承諾するが、従者を除いて誰もエミールをまともに扱う者はいない。さてアメリーの妹エラント Erante は、ディオニスの親友リジダン Lisidan と恋仲なのだが、ディオニスに付け文をする。当惑したディオニスは恋人にも親友にも打ち明け、アメリーへの自分の恋心は変わらないと誓う。。

〔第三幕〕リジダンがエラントの背信をなじると、ディオニスに恋文を書いたのは父親の言いつけによるものだ、と彼女は反駁。つまりディオニスが姉から妹に心変わりすれば彼の人格は疑わしいものとなり、父親が姉娘と貧乏な彼との結婚に反対する恰好の理由となるからだ、と。リジダンはひとまず安心するが、「芝居」という名目でエラントがディオニスに言い寄るのを目の当たりにすると、彼女がどうも本気らしいとわかってくる。ディオニスはエラントの情熱を退けるが、リジダンの不安は激しい。一方アメリーの父はアメリーとエラストとの結婚を取り決めてしまった。恋人たちは明朝未明に駆け落ちを決意。エラントもリジダンへの愛の証明として、共に姉達の逃避行に加わることにするが、実は姉の恋人への思いは消えてない。さてディオニス代筆のエミールの恋文は、差出人がディオニスとなっていた。それをアメリーに指摘されたエミールは激怒し、ディオニスと決闘だと騒ぐが、根は臆病なので何もできない。

「第四幕〕早朝の森。男装のクロリス Cloris がギターを奏でながら歌っている。彼女は恋人を海で失ったらしい。駆け落ちの一行が現れ、詳細を知りたがる。クロリスはアメリーだけに、自分が女であること、16の時に両親の意にそまぬ恋をして駆け落ちしたが、船が難破して恋人が波に呑まれたことを告げる。そこにエラストがアメリーを追って登場。彼とクロリスは互いに死んだと思っていた恋人を見出す。驚きと幸福のあまり、失神する二人。アメリーにとっては、エラストの問題はこれで片づいた。余裕ができた彼女は、クロリスと恋仲になったふりをしてディオニスをからかってやることにする。一方、姉妹の父親も乳母を連れて捜索にやって来た。彼は乳母の監督不行届きを責め、名誉も財産もない男に自分の資産を譲らねばならないのをくやしがる。

〔第五幕〕アメリーとクロリスは、ディオニスが見ているのを確かめて「芝居」をする。クロリスがアメリーを口説き、アメリーはためらうがやがて受入れ、二人は抱き合って接吻をかわす。ショックを受けてディオニスが飛び出すと、アメリーは心変わりを宣言。茫然とした彼はライヴァルを殺そうとするが思い止まり、リジダンとエラントに相談する。既にクロリスの正体と身の上を知っていたカップルは彼を安心させる。エラントは、お返しにこっちも姉を騙してやろう、とディオニスに同様の「芝居」を提案。承知した彼だったが、アメリーの苦しむ姿を見て、すぐに企みを暴露して謝ってしまう。そこに駆けつけたのはエラスト。彼は姉妹の父親から、全てを許す由の手紙を託されていた。めでたく三組のカップルが誕生。最後にエミールとその従者が現れ、主人の空威張りを従者が宥めて幕。

（鈴木美穂）

Rotrou : *Clorinde*

ジャンル　五幕韻文喜劇
上演　　1635年頃(ランカスター)、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版　　1637年
出典　　特にないが、先行の田園劇のパターンを踏襲。

『フロリモンド Florimonde』と同じタイプの喜劇であるが、『フロリモンド』より動きがあって、面白く読めるのは、登場人物のキャラクターに負うところが大きい。まずリザント。彼女は恋愛をコメディーとみなしており、本気で恋に悩むのは粋ではない、と考えている(とはいっても「恋の神秘」にからめとられてしまうのがこの種の芝居の常套的パターン)。それからドリメーヌ。彼女の虚栄心の強さは、まだ未熟な少女の自尊心のカリカチュアといえるだろう。最後にポリドール。マタモール型のほらふきではあるが、それでも最後には剣をとって決闘もする。筋の流れはおおむね安定しているが、時は三日にわたり、場所はパリの街路と郊外の森の二か所。

[第一幕] 舞台はパリ市中。クロランド Clorinde とセリアンドル Céliandre は実は相愛の仲であるが、互いの恋心を素直に表そうとしない。クロランドは彼を一層ひきつけようとお高くとまっているし、セリアンドルは彼女の嫉妬心を煽るためにドリメーヌ Dorimène を口説こうとしている。クロランドの友人リザント Lisante は、「理性的」で恋をしたことのない女。その彼女が親友の悩みをばかばかしく思いながらも同情し、策略を提案。セリアンドルを誘惑し、コケットなドリメーヌから引き離そうというのだ。

[第二幕] セリアンドルに慇懃を尽くされて虚栄心をくすぐられたドリメーヌは、彼を冷たくあしらいながら、他方でそれをクロランドに自慢する。苦しむクロランド。彼女の兄弟セリマン Célimant は、リザントに夢中で、何とかなびかせようとクロランドに 助力を乞うが、彼女はそれどころではない。さてセリアンドルは、ドリメーヌに心を奪われたふりをしても、一向にクロランドが動揺しないようなので、自信を失い、不安に苛まれ、セリマンに相談する。セリマンは当世の若い女の子の気質(好きな男には本心を見せず、冷たくあしらったりからかったり...)を語り、大丈夫、クロランドはセリアンドルを愛してる、と保証するが、セリアンドルは信用しない。リザントの方はといえば、セリアンドルとふざけ合い、彼のことをクロランドに向かって賞賛し、彼女を嫉妬させる。

[第三幕] リザントは、半ば冗談のようにセリアンドルを誘惑。だが彼はもちろん本気にしない。たとえ世界一の美女が現れたってクロランドには及ばない、と。そこに大言壮語を吐くので有名なポリドール Polidor が登場し、リザントに愛を告白するが軽くいなされ、追い払われる。セリマンは、あまりにも女たちにもてるセリアンドルに劣等感を抱き、リザントに愛の告白をするのに気遅れしている。自分の魅力を過信しているドリメーヌは、あたしがセリアンドルにひとこと言えば、彼はリザントにちょっかいを出すのをやめ、彼女はセリマンのものになる、と励ます。しかしセリアンドル

は、もう彼女に目もくれない。あたしを騙したのね、とくやしがるドリメーヌ。それを見て喜ぶリザント。

［第四幕］リザントは、セリアンドルを試すために誘惑した、と本人に告白。だが実は、本当に彼に恋してしまっていた。セリアンドルはクロランドの冷やかさに絶望し、彼女を忘れるためにオランダとの戦争に参加することを決意。その由を手紙に書いてクロランドに送る。手紙を受けとった彼女は慌て、彼の旅を阻む決心をする。だがその前に手紙の宛名をドリメーヌに変え、さんざん自分を苦しめた復讐をすることにする。心を決めたクロランドを見て、リザントは本心を明かし、もう恋人たちの邪魔はしない、と告げる。一方、ポリドールは今度はドリメーヌに恋を告白し、彼女を侮辱したセリアンドルと決闘するつもりでいる。そうすればドリメーヌの愛が得られるだろう。だがドリメーヌは、セリマンから例の手紙を受けとって狂喜する。とはいえ、明朝旅立つセリアンドルのもとに駆けつけようとはしない。彼女にとっては彼が彼女を愛している、と自分で納得できれば充分なのだ。セリマンは彼女の虚栄心の強さに呆れる。ポリドールは激怒し、セリアンドルを亡き者にする決意を固める。

［第五幕］郊外の森。友人のクラリモン Clarimond と出立してはみたが、セリアンドルの心は重い。クロランドを諦めきれない。そこにポリドールが剣を手に追いかけてくる。リザントとドリメーヌを奪った卑怯な男は死んで当然。いやどちらも愛していない、とセリアンドルは説明するが、ポリドールのような男が耳を傾けるはずはない。二人は戦う。止めに入ったのはドリメーヌ、やはりセリアンドルを追ってきたのだ。彼女は手紙を見せ、二人の愛を確かめようとするが、セリアンドルは宛名が書き直されているのを指摘。もめているところに二人の盗賊が現れ、セリアンドルに襲いかかる。だが彼らは変装したクロランドとリザントであった。クラリモンがそれを見抜く。クロランドはやっとセリアンドルに愛を打ち明け、恋人たちは抱擁し合う。それを見てセリマンも勇気を得、リザントを抱擁。リザントは、まあこんなものか、とセリマンを恋人と認める。ドリメーヌはがっかりして立ち去るが、ポリドールが追ってゆく。

（鈴木美穂）

Rotrou : *Florimonde*

ジャンル　五幕韻文喜劇
初演　1635年頃（ランカスター）、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版　1655年
出典　先行の田園劇のパターンを踏襲

初演は『クロランド Clorinde』と同じ1635年であるが、ランカスターは、この作品の方が後に上演されたものとみている。出版された年が1655年ということは、死後出版である（ロトルーは1650年死亡）。つまり作者は、『フロリモンド』の出版に決して肯定的ではなかったということだ。やは

りランカスターの推測によれば、ロトルーはこれを不出来な作品とみなし、代わりに『クロランド』を出版したというが、根拠はない。この程度の「不出来」は、なにも『フロリモンド』に限ったことではない。だがランカスターの推測にも頷けるほど、この作品はかなり散漫かつ停滞しがちで、本当に面白味に欠ける作品である。構成は脆弱で、人物も際立った特徴がない。筋の一致は当然守られておらず、場面の繋がりにはいささか無理がある。時は24時間以上で、場所はフランス中央山岳地方フォレの戸外。ランカスターは、フォレの数か所、としているが、一か所にしても上演は可能だろう。

［第一幕］美男のクレアント Cléanteにとって、一番大切なのは自由と平安。だから誰にも恋をしない。そんな彼に、驕慢な美女フロリモンド Florimonde が心を奪われてしまった。彼女は率直に恋心を告白し、彼の情熱をかきたてようとするが、岩のような彼の心は動かない。絶望したフロリモンドに、テアスト Théasteが言い寄る。だがテアストは、フロリモンドの友人のクレオニー Cléonieと交際しているので、フロリモンドは相手にしない。クレオニーはテアストに、最近当地にやってきた若い余所者のことを告げる。彼は、テアストは世界一の裏切り者だ、と言っているらしい。

［第二幕］テアストは、いくら手ひどくふられてもフロリモンドを諦めることができない。友人のエヴァンドル Evandre は、彼の浮薄な心をいましめる。今はクレオニーとつきあっているし、以前はフェリシー Félicie に夢中だったではないか、と。フェリシーは亡くなったし、クレオニーはそもそもフロリモンドに近づくための布石だった、とテアスト。クレアントは、テアストの口からフロリモンドへの情熱を聞かされ、少しばかり心穏やかでなくなる。

［第三幕］クレアントへの想いから逃れられず、苦しむフロリモンドに、エヴァンドルは策をさずける。愛を乞うかわりに投げ捨てたらどうか、テアストに夢中のふりをしてみたら、と。彼女は納得。エヴァンドルは、クレアント、テアストの両者に、フロリモンドの「心変わり」を伝える。前者は失った宝の価値に気づき、後者は有頂天。クレオニーはテアストから絶縁を言い渡されるが、憎むほどには愛してなかった、と強気である。そんな彼女を、余所者ティルシス Tircis が慰める。彼はリヨン出身で、フェリシーという姉妹がある。彼女はたまたまリヨンに滞在していたテアストと恋仲になり、テアストは結婚準備のため、いったん帰郷した。だがすぐ後に彼の兄弟ティマント Timante が現れ、テアストの心変わりを知らせた。この侮辱を雪ぐため、ティルシスは当地にやって来たのだった。驚くクレオニー。彼女は以前、ティマントと相愛の仲だったが、彼に捨てられたのだ。兄弟共に殺してやる、と誓うティルシス。

［第四幕］激しく後悔するクレアント。ついにフロリモンドの前に膝まづき、この二日間で自分が変わったこと、極度に冷たい心は同じだけ熱い心になったことを告白。だが彼女はそうやすやすと許しはしない。自業自得だ、と彼は自分を責め、一方でやはりテアストを恨み、生かしてはおけないと息まく。そうはさせない、テアストへの攻撃は自分への攻撃、と剣を手に飛び出したのはティルシス。クレアントはわけもわからず彼と戦う。止めに入ったのは当のテアスト。ティルシスは逃げ、今度はクレアントとテアストがフロリモンドを巡って戦う。それを仲裁したのはエヴァンドル。テア

ストは、自分を擁護してくれたらしい未知の人物に会って感謝したいと思う。同時に、自分を誹謗中傷している余所者にも、会って叩きのめしてやりたい、と。

［第五幕］フロリモンドとクレアントの立場は完全に入れ替わった。彼は心底から悔やみ、苦しんでいる。テアストとの抱擁まで見せつけた彼女は、さすがにもう充分と判断し、クレアントに許しを与える。彼は喜びに陶然となるが、テアストは茫然。クレオニーの元に戻りなさい、とフロリモンド。たがクレオニー自身は、本当はティマントをまだ愛している、それにテアストの以前の恋人フェリシーが健在であるのは、彼女の兄弟ティルシスから聞いている、と言う。テアストには信じられない。そこにティルシスが現れ、テアストに挑みかかる。テアストはその顔を見て、剣を落とす。謎の余所者ティルシスこそフェリシーだったのだ。ティマントが姿を見せ、すべてを懺悔する。テアントの恋人だったフェリシーに魅せられ、当時の恋人クレオニーを捨てて自分のものにしようと思い、テアストにはフェリシーが死んだと、彼女には彼が心変わりしたと偽った、だが肝心のフェリシーは振り向いてくれず、今はクレオニーとよりを戻したい、と。クレオニーはティマントを、フェリシーはテアストを許す。三組の結婚が行われるだろう。

（鈴木美穂）

Tristan L'Hermite : *La folie du sage*

ジャンル　五幕韻文悲喜劇
初演　1644年（推定）
出版　1645年
出典　とくになし

時と場所（数時間、宮殿内の二ないし三ヶ所）は一致、がランカスターの述べるように、アリストの錯乱が結末への動力になりえていないので、筋の完璧な一致はない。作家にインスピレーションを与えた作品としては La Calprenède の *Edouard*（最初の二幕）が、またアリストの錯乱についてはトリスタン自身の自伝的小説 *Le Page disgracié* が考えられる。ここで主人公アリストンは熱にうかされて錯乱する。狂気をあつかうものとしてはそのほか *L'Hopital des fous* (Beys) や *Les visionnaires* (Desmarets) などが当時成功をおさめていた。さらにシェークスピア劇などいくつかの作品に類似点が認められるが、総体としてはトリスタンのオリジナルな劇となっている。悲喜劇はこの頃もう下火だったが、この芝居に王弟とその妃の愛の物語が読みこめたためか、かなりの成功をおさめた。王弟ガストンの人気の失墜とともにこの悲喜劇も消える。正気を失ったアリストが気のおもむくままにつむぎだす言葉の世界は圧巻だが、総じて言葉の両義性が人物の緊張を生むなど言葉が重要ポイントになっている。またとり違いは眠りと死にもおよんでいる。なお、マウロのリストに上演記録はのこっている (1646 − 7)

〔第一幕〕サルディニアの王は、鏡や花火を有効に用いて戦争を勝利に導いた立て役者アリスト Ariste をたたえる。がその直後、アリストの娘のロズリー Roselie に一目ぼれをしたので愛妾にしたい、と申しでて、父アリストを絶望の淵につきおとす。神の子である国王には服従すべきだが、その王も判断をまちがって無実の者を不幸においやることがある、娘は王の妾になるには身分がたかすぎる、と言ってアリストは王に再考をうながす。が王は聞く耳をもたない。二人はするどく対立、もの別れへ。アリストは不幸を星の影響と考え死のうとするが、知的な選択ではないとし思いとどまり、よき市民の模範になろうと決意。娘に哀れみを感じているさなかに王が戻ってくるので、姿を消す。一方、王はお気に入りの貴族パラメード Palamede に新しい恋のうちあけ話をする。実はこのパラメードはロズリーとは相思の仲で、すでに結婚が決まっていた。はからずも王が恋敵であることを知ったパラメードは、しかし忌憚のない意見を述べる。アリストの功績からいって妾ではあまりにも礼を欠くとする彼の考えを、王は受けいれる。

〔第二幕〕美・富・愛のすべてを手にいれて幸せの絶頂にいるロズリーに不安が芽ばえた。原因は父アリストの態度の豹変にある。やがて父は悲痛な面持ちでロズリーのもとを訪れ、運命の急変を告げる。神殿で祈るよう命じそれ以上は言わず去る。王の手紙を届けにきたパラメードから、禍のもとが王の横恋慕にあったと知らされたロズリーは、もう諦めきっているパラメードを強く非難。妃にしたいとする王の申し出(手紙)に接しても、王の素行の悪さを指摘して迷惑に思うだけ。身をただひこうとするパラメードを不実となじり、自身の愛の不変なことをくり返す。パラメードは二人の愛の完結を疑ったことを嫌悪し、自殺を試みるがロズリーにとめられる。ロズリーも過酷な運命は星の巡りあわせのせいだとし、婚約者の愛を疑ったことを反省する。がそこに王からパラメードあての催促状が届く。婚姻の式をあげるためロズリーの到来を王が待ちきれなくなったからだ。ロズリーは自分に考えがあるからと言って、王にはロズリーの怒りと拒否を伝えるようもとめ、ひとり退出する。

〔第三幕〕パラメードがロズリーを愛しているという噂を、王は聞いた。しかし有徳の士である彼がロズリーを好きであっても不思議はないと王は考える。それよりもなぜ求婚が拒否されたか、解決法がなにかを考えることが先決だった。折りよくアリストがきたので、娘を正妻に迎える決意を伝えるため、二人でアリストの私室にはいる。が、アリストの侍従は二人の目前で幕をひいて、死体となったロズリーとコンフィダントのカノープ Canope をみせる。毒盃もそばに置かれていた。毒を与えたのは誰か尋ねる王に、あなたからだとアリストは答える。娘が死んだのは王のせいだという意だけのアリストの言葉を王は曲解し、アリストは正気を失ったと思う。彼女の父あての遺書を、王はひとりで読み、毒をもたらしたのはパラメードだったことを知る。もちろん毒が比喩的意味で使われている可能性があるなどとは考えてもみない。即刻、パラメード逮捕の命がだされる。

〔第四幕〕ただ眠っているだけのロズリーとカノープの体に防腐措置が施されたらたいへん、と医者と大道医者がアリストの住まいにかけつける。戸口にいたアリストは医者らからそこを行くのは誰かと問われたが、それをあなたは誰かと尋ねられたと誤解し、膨大な知識のなかから思い浮かぶままをイメージにしてその説明をする。相手が医者だと聞くと、治療法に関して誰の信奉者かと問

い医学の知識を披瀝するが、すでに現実の認識がうすれ錯乱していることが明らか。一方王は、戦勝のあとの不運に、星回りの悪さを嘆く。そこにパラメードが連行される。彼は直前にロズリーの死の報を聞いて自殺をはかったが、とめられた。毒をロズリーに与えたことを王はパラメードに非難し、彼女の遺書をみせる。パラメードは最初毒については否定していたが、遺書を見てロズリーがそういうならと反論をやめる。ロズリーの怒りをかってしまったことに深く傷つき死ぬしかないと思う。王はそのかたわらにいて侍従からロズリーが生きていることを耳打ちされる。パラメードはなにも知らされないまま再び幽閉。王はアリストが正気に戻ったと聞き、すぐに彼を呼びにやる。〔第五幕〕ロズリーは今度は剣で死に、臣下の自由な恋愛を許さない専制者からのがれようとする。が、王のもとにでかけた父アリストをカノープのすすめで待つ。父は妃に迎えたいという王の申し出に満足して戻り、義務に従うべきだと主張。しかしロズリーは不実を働くのはいやだ、今ある自分は父のおかげだがそれ以上に天のおかげ、と言って父に従わない。父はついに娘の徳の高さに屈する。そこに返事をもとめて王が訪れる。アリストは娘にパラメードという婚約者がいて王と結婚する気がないことを、遠回しに説明するので王はアリストの錯乱がまだなおっていないと誤解するほど。また重大事をアリストが知らないとその忘却も病気のせいにし、錯乱は天才的ひらめきと表裏一体だ、と考えて納得してしまう。結局ロズリーが呼ばれ、彼女は遺書で毒を比喩的に死をもたらすものの意で用いたことを告白、パラメードの罪がはれる。さらに王はカノープから自殺時の事情をきき、二人が相思の仲だと確信するにいたる。ついに王は名君となる決意をかためる。しかし両義にとれる言葉を用いて専制者になると思わせつつ、最後に二人を結婚に導く。そしてアリストの博識な錯乱をたたえて終わる。

（野池恵子）

作品梗概集索引

Bidar : *Hippolyte* ····· Ⅲ 79

Boyer : *Ulysse dans l'île de Circe* ····· Ⅲ 95

Corneille, Thomas

: *Ariane* ····· Ⅲ 89

: *Bérénice* ····· Ⅳ 83

: *Camma* ····· Ⅲ 88

: *Circé* ····· Ⅲ 98

: *Darius* ····· Ⅳ 85

: *La Mort d'Achille* ····· Ⅲ 91

: *La Mort de l'empereur Commode* ····· Ⅵ 83

: *Le Comte d'Essex* ····· Ⅵ 92

: *Persée et Démetrius* ····· Ⅵ 85

: *Timocrate* ····· Ⅳ 81

Corneille, Pierre : *Andromède* ····· Ⅲ 96

Desfontaines : *Belisaire* ····· Ⅶ 100

Desmaretz de Saint-Sorlin : *Mirame* ····· Ⅶ 103

de Visé, Donneau

: *Les Amours de Bachus et d'Ariane* ····· Ⅶ 107

: *Les Amours de Venus et d'Adonis* ····· Ⅶ 106

Garnier : *Hippolyte* ····· Ⅲ 74

Gilbert

: *Hypolite* ····· Ⅲ 78

: *Les Amours de Diane et d'Endimion* ····· Ⅶ 105

Gougenot : *La Fidelle Tromperie* ····· Ⅶ 96

La Pineliere : *Hippolyte* ····· Ⅲ 76

L'Hermite de Vauzelle : *La chûte de Phaéton* ····· Ⅲ 94

Lully et Quinault

: *Alceste* ····· Ⅵ 88

: *Atys* ····· Ⅵ 91

: *Cadmus et Hermione* ····· Ⅵ 86

: *Thésée* ····· Ⅵ 89

Mairet

: *Chryséide et Arimand* ····· Ⅳ 63

: *La Silvanire* ····· Ⅳ 66
: *La Sylvie* ····· Ⅳ 65
: *Les Galanterie du duc d'Ossonne* ····· Ⅳ 68
Pradon : *Phèdre et Hippolyte* ····· Ⅲ 81
Rotrou
: *Agésilan de Colchos* ····· Ⅶ 94
: *Amélie* ····· Ⅸ 79
: *Antigone* ····· Ⅵ 80
: *Belisaire* ····· Ⅶ 98
: *Captifs ou les Esclaves* ····· Ⅸ 78
: *Célimène* ····· Ⅷ 84
: *Cleagénor et Doristée* ····· Ⅳ 72
: *Clorinde* ····· Ⅸ 81
: *Cosroès* ····· Ⅸ 76
: *Crisante* ····· Ⅵ 78
: *Diane* ····· Ⅷ 82
: *Don Bernard de Cabrère* ····· Ⅷ 80
: *Filandre* ····· Ⅷ 85
: *Florimonde* ····· Ⅸ 82
: *Iphigénie* ····· Ⅵ 81
: *La Bague de l'Ou'bli* ····· Ⅲ 83
: *La Belle Allphréde* ····· Ⅲ 85
: *La Sœur* ····· Ⅶ 102
: *Laure Persecutée* ····· Ⅲ 86
: *Les Occasions perdues* ····· Ⅳ 70
: *L'Heureux Naufrage* ····· Ⅶ 93
Tristan l'Hermite
: *La Folie du sage* ····· Ⅸ 84
: *La Marianne* ····· Ⅲ 74
: *La Mort de Chrispe* ····· Ⅳ 78
: *La Mort de Sénéque* ····· Ⅳ 77
: *Osman* ····· Ⅳ 80
: *Panthée* ····· Ⅳ 75

* ローマ数字Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ、Ⅶは掲載した既刊号数を示す。